

「緑」はエコロジーに関わってくる。経済は、オイコス(家計)とノモス(秩序)、つまり家計をうまくやりくりをするという意味で、エコロジーは、オイコスとのノモスの原理で、地球上の資源をたくみにやりくりすること。経済とエコロジーは密接に関係している。

もう一つの人間の「絆」について、『ヨハネパウロ二世の回勅』ではこう書かれている。「自然環境の非時勢的な破壊に加えて、より深刻な人間的環境の破壊を指摘しなければならない。このことは決して十分な注目を集めているとはいえない。絶滅の危機に瀕している動物の天然生息地の保護には、まだまだ不十分とはいえず正しく配慮しているが、それは今日の動物が自然全体の釣り合いにそれぞれ固有の貢献を行っていることを人々が理解しているからだ。ところが、真のヒューマンエコロジー(人間の絆)のための道徳的条件を保護する努力はあまりにも少なすぎる」

日本人はつい最近になって緑と絆を完全に崩壊しはじめた。「ミダスの呪い」に取りつかれているからだ。ギリシャ神話に出てくるミダスの王の望みは、手に触れるもののすべてが黄金に変わることだった。望みはかなえられるが、自分の愛する娘も、人間の絆も自分が触れた瞬間に黄金に変わってしまうという事実に行き当たり、王は驚愕する。この呪いに日本人は取りつかれ始めた。スウェーデンの子供たちの環境の教科書に、「私たちは自然と人間をむさぼり食う強盗文化にとりつかれている」とある。強盗文化に取りつかれた結果、日本は二つの過剰と三つの危機にあえいでいる。二つの過剰とは、過剰な豊かさ、貧困の過剰。三つの危機の一つは「経済の危機」。もう一つは「社会の危機」、人間の絆を全く失い始めた。そして「自然破壊の危機」も深刻になり始めている。これはミダスの呪いで、経済成長をしなければならないという脅迫観念にとりつかれているからだ。経済成長で人間は幸福になれるかといえば、必ずしもそうではない。経済成長が賃金の上昇につながるわけではないことは、これまでの日本人の経験でよく理解したはずだ。

そして「イースタリンの逆説」。リチャード・イースタリンは、経済成長するということと人間が幸福になることとは関係があるかどうかを研究した。結果、確かに経済成長で物質的に豊かになることによって幸福になるのは事実だが、ある一定の生活水準に達すると物質的に豊かになることが人間の幸福にはならない、と発見した。

日本の現在の政策を支えている思想は、豊かな人がより豊かになると、そのおこぼれで貧しい人も豊かになってゆくというトリクルダウン理論である。この理論には、人間の欲望・欲求には限界があり、満たされてしまうと、もうその人はほかの人に与える行動をするだろう、「富は必ず人間の生活に必要なものに使われる」という前提があった。ところが現在では富は使うために持っているのではない。人々を支配し動かすことができるから富を持つ。権力を握るために富を持ち始めると、もうとめどがない。トリクルダウンしない。

トリクルダウンしないということ、イースタリンの逆説を組み合わせると、現在日本がやっている政策は、だれも幸福にしないということになる。トリクルダウンしないのだから、貧しい人々を救うことにはならないし、より豊かになっていく人も、家族と一緒にいる時間を失うなど犠牲にすることがあまりに多すぎる。だれも幸福にしない。

スウェーデンの環境の教科書は次のように教えている。「私たち人間の欲求は二つある。一つは豊かさを実感する、つまり物を所有したいという所有欲求。もう一つは人間と人間とが触れ合いたい、また人間と自然が共生したい、絆と言っている存在欲求だ」。ヨハネパウロ二世の言葉を使えば、「人間は所有する欲求と同時に、在ることという欲求を持っている」と教え諭している。「工業社会には貧困や欠乏が存在したがゆえに、存在欲求を犠牲にして所有欲求を求めてきた。所有欲求がある程度満たされ欠乏が解消された今、私たちは人間の人間の欲求である存在欲求を追求することができる時代に足を踏み入れた」とスウェーデンでは教えている。これは緑との共生、人間同士の共生によって存在欲求を充足するような時代へ、足を踏み入れてゆくことだと思う。

オムソーリとラーゴムという二つのスウェーデン語を紹介したい。オムソーリのもともとの意味は「悲しみを分かち合う」ということ。日本語に訳すと社会サービスのことで、福祉に医療、教育を加えた、日本語の社会福祉よりやや広い概念になる。

ラーゴムは、「ほどほど」「バランスをとる」という意味。私たちはさまざまな意味でバランスを失った社会になった。仕事と生活、公と私にもアンバランスが生じている。悲しみを分かち合う領域を、ほどよい割合でバランスを取ろうという教えがオムソーリとラーゴムという言葉だ。

私たちはこれまでのような工業社会、腐らないものを作っていた時代から、知識や情報の時代に移ろうとしている。工業製品は蓄えておく意味があったが、知識は蓄えておけない。知識は自分で抱え込んでほかの人に教えないとなると何の意味もない。知識は惜しみなく与えないと発展しないのだ。

経済発展をしている国々を見てみると、例えばフィンランドは農業国だが、ノキアなど知識産業の分野では、一挙に競争力の強い国になる。人間の絆があるからだ。農業も同じこと。農の営みというのは人間の絆だ。農産物は工業生産物と違って腐ってしまう。ためておくことができない。そこで私たちは、人間がお互い助け合ってゆく原理で、農の営みをしてきた。ところが日本の農業政策は、農業の工業化ですべてダメにした。一方フィンランドは農業を活かしつつ、人間の絆が残っているから互いに与え合い、知識産業でもそれが優位に働く。ミダスの呪いに犯されていない。そうしてフィンランドは世界で最も競争力の高い国に躍り出た。

緑と人間の絆がもたらす木陰の下で地域の発展計画を行う場合には、ものごとの部分ではなく全体を見ることが一番重要だ。holy という英語は「神聖なもの」という意味だが、wholly「全体的」という英語と語源も発音もまったく同じだ。この観点から、スウェーデンで行っている「故郷(ふるさと)存続運動」を紹介し、私たちが行く次の道について考えてみたいと思う。

人間は必ず自然を守る。これまでも人間が自然破壊をしようとした瞬間は歴史の中でいくつもあるが、人間はいつも自分たちが自滅することによって自然を守ってきた。例えば、野ネズミと共生していたペスト菌を自然破壊によって追い出して自滅し、あるいは戦争を繰り返しながら自滅し、自然を守った。日本の人口が増え続ける、あるいはこのまま維持されたら、地球は当然もたない。人口減少社会になってゆくのは地球を守るためなのだ。

日本政府は、人口減少社会に陥るのをどうにか食い止めなければと言うが、それには二つの方法しかない。子どもをたくさんつくるのと、今生きている人を死なせないこと。だが日本政府が展開しようとしている政策は、子たくさんはいいが長寿化は困るという、子たくさん若死政策と言っていい。もしもこういう道をとらないで自然を守ろうとしたら、それぞれの地域にある自然と人間との生活を最適な関係にし、人間と人間の絆を、その地域社会の自然と人間の関係に合わせるような形に創り上げてゆく。つまりスローライフの道しかないということだ。

スウェーデンの環境の教科書から、地域について教えているところを読み上げたいと思う。「すべての地域には独自の資源があり、それはいつの時代においても、そこに住む人間たちに生存の基礎を提供し、彼らの活動と発展の枠組みを与えてきた。思いわずらうな。地域にはその地域で生活するだけの十分な資源はある。人間は自らの地域に根を持ち生活をもってきた。その地域と自然とのかかわりは人間の社会的、文化的生活に浸透しており、人々の感じ方、考え方、ものの取り扱い方に影響を与えた。地域とのかかわりは、人々の安寧および営みにとって基本的な意味をもってきた。いま人々が近視眼的な利益を求めて、生まれ出た環境を捨てて異郷へと移り住み、その地域が抜け殻のようになったとき、その結果がどんな結果が訪れるだろう。故郷を残そう。さもなければ無人となってしまうだろう。そういう危機感が強い反響を呼び起こし、故郷存続への闘いを生み出しているのだ」

これは日本の故郷運動とはまったく違う。日本人は室生犀星の詩、「ふるさとは遠くにありて思うもの」というマジックにひっかかっている。スウェーデンの運動は違う。「故郷は近くにありて愛するもの、守るもの」なのだ。スウェーデンでは、故郷を見捨てて出てゆくということが絶対がないので、全土で人口構成はほとんど変わらずにこれからも維持されてゆく。日本では故郷から出てゆくから地方の高齢化が急速に進むと同時に、出て行った先でも出生率は低くなる。東京は世帯の半分が単身者だから出生率が高まるわけがない。

私たちの故郷存続運動の基本的な考え方は、基本的ニーズ 人間が人間として最低限のニーズ を最優先する戦略をとり、そしてヨーロッパの経済発展の合言葉「slow up and calm down(スローアップ アンド カームダウン)」 ゆっくり進んで冷静に、冷静に という道をとる必要があるのではないかと思う。

ご静聴ありがとうございました。